

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

日本の使徒聖ニコライの聖典翻訳研究 :
正教会の用語翻訳の特殊性をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2516

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



論文内容の要旨

学位申請者氏名 Blyzna Inna

日本正教会で聖ニコライは亜使徒と呼ばれている。真の使徒、神に選ばれた人、神に特別に祝福され油つけられた人でない限り、聖ニコライが成し遂げたことの一つも出来ないからである。つまり、聖ニコライは何千人もの日本人をイイスス・ハリストスに導き、大聖堂、多くの教会を建て、神の言が日本にも響くように、日本人も全世界の正教徒と一になって神を讚美できるように聖典を翻訳したのだ。聖ニコライが翻訳した聖典は、最も重要で分量の大きいものだけ（新約聖書及び礼拝祈祷文）でも一万頁に及び、今も正教会で奉神礼の時に使われているが、研究は未だ乏しい言わざるを得ない状況にある。しかし、その研究は非常に意義深い課題である。それによって、その翻訳の意味、その訳語が選ばれた理由、そこに潜む正教会の独自性及び神の真実をよりよく理解することができ、聖ニコライ及び彼の協力者パウエル中井の共同事業から誕生した、国語辞書にも記載のない独自の語彙の意味、また聖ニコライ及び中井が重視した各漢字の意味機能から生じる既存の日本語の語彙の意味拡張、意味特徴を示すことができる。

本研究はこの課題に取り掛かろうとする些細な試みである。まず Θεός... εἷς/μόνος (Бог един) という表現に注目し、聖ニコライ訳の「惟一の神」、「獨一の神」、「一の神」、「独神」、「同一の神」、「一人」がそれぞれ特別な意味上のニュアンスを持ち、それらすべてが一となり、神について真実・教義の奥義をよりあらわにしていることを示す。「獨一」、「同一」のように、聖ニコライは単語を構成する各漢字の意味に細心の注意を払いながら、「一」の多義性を生かして、「獨一」及び「同一」の辞書の意味を拡張している。「獨一」は、「ただ独り」及び「一なる」（至聖三者の三位が一なる、イイスス・ハリストスの二性が一なる）という意味を合わせている。「同一」については、「同じ」及び「一なる」意味を合わせている例もある。「惟一」の場合は、神がただ一であり、ただ独りであり、その他に神が存在しない意味を示したいがため、後期の翻訳では、わざと初期段階で使った「ゆいいつ」の読みを採用せず、「惟一」を用いるようになった。逆に「獨一」に関しては、初期の段階に「どくいち」と読まれたことがあったが、各用語の意味を徐々に洗練し、区別したことによって、後期には「どくいつ」の読みだけが出現するようになった。「一人」の読みに関しても、イイスス・ハリストスの人性を明示するために、един に対して原文に「人」に相当する語彙がなくても「一人」を用い、「ひとり」ではなく、「いちにん」の読みを当てている。

次に多くの翻訳論争を起こした πνεῦμα (дух) の出現する表現の翻訳を考察し、「神」及び「靈」の字源、「神」、「靈・靈」、「聖靈・聖靈」、「御靈」などの辞書の意味

から聖ニコライが πνεῦμα (дух) に対して「神」を選んだ理由を追求する。聖ニコライが πνεῦμα (дух) に対して「神」を用いたことで、正教会の翻訳では天国を受け継ぐために人間が「神^{れい}」の部分、すなわち聖神^{せいしん}の恩寵^{かみ}を獲得し、神との縁を復元すべきであることが明確になった。さらに、他訳と違って、聖ニコライの翻訳では「神^{れい}」及び「靈^{れい}」が対立関係にある。聖ニコライの「靈」が、土に属し、朽ちる者（コリント前書 16:47-50）であるのに対して、聖ニコライの「神^{れい}」は天に属し、不朽、不死、神の国を嗣ぐ者である（コリント前書 16:47-54）ので、人間は天国に行くには「靈」から「神^{れい}」へのはしごを昇り、汚れから機密（洗礼、痛悔、領聖＝聖体拝領など）及び祈りを通じて徐々に清らかになり、徐々に聖神^{せいしん}の恩寵に満たされ、成長すべきであることが明確である。新約聖書で言われる、聖人たちが実例として見せている聖神^{せいしん}の恩寵は道理、論理に由来するものではない。常に機密に与り、祈る努力があれば、人間の霊において徐々に熟していく真実及び慈愛の果実として現れるので、聖ニコライは Πνεῦμα τῆς ἀληθείας (Дух истины) を「眞實の神^{しんじつ しん}」と訳し、新約聖書においては「真理」を用いない。さらに、新約聖書では聖ニコライが人間の霊の意味で登場する πνεῦμα (дух) を「神^{しん}」と訳しているのに対して、『聖詠經』（旧約聖書の詩編、Psalms）では人々がまだ聖神^{せいしん}と水とに由る洗礼を知らないので、「靈^{たましひ}」と訳し、「神^{しん}」を使わないという意味区別も特徴的である。

Θεὸς ζῶν (Бог живый) 及び ἀνάστασις/ἐγερσις (воскресение) という教会用語・表現の場
合は、「活」及び「生」の字源の相違、また用いられている文脈から聖ニコライの「活ける
神^{かみ}」・「生ける神^{かみ}」の特徴、「活ける水」・「活ける言^{ことば}」・「活ける石」・「活ける祭^{まつり}」・
「生ける餅」の意味上のニュアンス、「復活」・「甦」に対する聖ニコライの「復活」の
特徴を示す。聖ニコライの翻訳においては воскресение「復活」及び Бог живый「活ける神」
という表現が共通の字「活」で結ばれ、信者たちの内に常に活動し、すべての人間を復活
の恵みに与らせようとする活ける真^いの神^{まこと かみ}が明示されている。新約聖書と違って、旧約聖書
では ἀνάστασις/ἐγερσις (воскресение) の意味が秘められているので、聖ニコライは『聖詠
經』によく出現する воскресни, Господи/ воскресни, Боже に対して「復活」を使わずに「主
よ、起きて」・「神よ、起きて」と訳しているが、十字架の上に釘打たれたイイススを見て
泣き、復活の秘密の奥義を誰よりもよく悟っている生神女マリヤの Чадо Мое, ... воскресни
の嘆きを「我が子よ、…復活して」と翻訳した聖ニコライの意味感覚は優れている。

最後に εὐλογητὸς ὁ Θεὸς (благословен Бог) 、εὐλογητὸς Κύριος (благословен Господь) 、
εὐλογημένος ὁ ἐρχόμενος (благословен Грядый) という表現に注目し、聖ニコライの翻訳で
は‘讚美’及び‘祝福’の意味がどのように区別されているか考察する。εὐλογητὸς ὁ Θεὸς
(благословен Бог) 、εὐλογητὸς Κύριος (благословен Господь) の場合、聖ニコライは‘讚
美’の意味を生かし、εὖ (благо) 及び λόγος (слово) からなる εὐλογητὸς の各語根に対し
て漢字を一つ（すなわち「祝」と「讚」）当て、「祝讚せらるる哉神^{しゆくさん かなかみ しゆくさん}」、
「祝讚せらるる
哉主^{かなしゆ かみ さんび}」と訳している。新約聖書では‘神を讚美する’意味を表す動詞が多いので、日本人

にとって馴染みのある「讚美」を ^{さんび}αἰνέω (хвалить) に対して用い、また特別の神の名称として出現するマルコ 14:61 の ὁ υἱὸς τοῦ εὐλογητοῦ (Сын Благословенного) 「讚美せらるるもの者の子」(マルコ 14:61) に対して用いた。そのため、他の場合に聖ニコライは「讚美」の意味を表す新しい訳語を使う必要があった。そうして、「讚」という字をベースにし、それに特別のニュアンスを表すもう一つの字を加えることによって、「祝讚」、「讚榮」、「讚詠」、「讚め揚げ」のような多くの新しい訳語が使われるようになった。奉神礼でよく歌われている εὐλογημένος ὁ ἐρχόμενος (благословен Грядый) の場合、聖ニコライは「讚美」及び「祝福」の意味を文脈によって区別した。新約聖書において、イイスス・ハリストスが人類にとって待ち遠しいメシア、すべての人間の救世主であることを示すため、聖ニコライは εὐλογημένος ὁ ἐρχόμενος ἐν ὀνόματι Κυρίου (благословен Грядый во имя Господне) を「主の名に因りて来る者は祝福せらる」と訳している。それに対して、奉神礼では「主の名に因りて来る者は崇め讚めらる」となっている。

このように、本研究は、幾つかの教会用語・表現に焦点を当て、聖ニコライが私たちに残した宝物の意義を理解するための一步を踏み出そうとし、この幾つかの教会用語・表現の翻訳の特殊性からも、神自らが教え、預言者、聖使徒、聖人が徐々に人間に説き明かす真実・教義を読み取ることが可能であることを示した。それは一体にして分れざる至聖三者、全き神全き人イイスス・ハリストスの二性一位、常に信者の内において活動している活ける神、ハリストスが人間に贈った復活、聖神^{せいしん}及び人間が獲得すべき神^{しん}の活ける絆、全世界に讚美される神^{かみ}についての真実・教義である。